

# 浪江の

# こころ通信

・第78号・



平成23年3月11日に発生した東日本大震災、そして福島第一原子力発電所の事故により、町内全域に出されていた避難指示は、平成29年3月31日に「帰還困難区域」を除き解除されましたが、多くの浪江町民は福島県内外に分散避難をしています。長期化する避難生活、先の見えない不安の中で、町民の皆さんがどのような思いで生活し、ふるさとへの思いを抱いているのか。

こうした町民の思いをつなげるため一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアム(※)が中心となり、全国各地のNPO、大学等の皆さんが取材を進め、浪江町との連携のもと「浪江のこころ通信」が編集・発行されています。

この“浪江のこころプロジェクト”は、町民の皆さんの声を「浪江のこころ通信」を通してお届けし、ふるさと浪江町がかつての暮らしを取り戻すことへの願いとこだわりを発信・共有しようとするものです。

※一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアムは、東北圏(7県)の地域コミュニティ再生や協働のまちづくりの推進を目的として、大学、NPO、企業、経済団体、行政等が連携したコミュニティ支援ネットワーク。仙台が本拠地。

## 再取材シリーズ

### 再会・浪江のこころ

これまで取材を受けていただいた皆さんに、再度の取材を行うコーナーです。

3・11から6年以上が経過した今、感じていること、伝えたいこと、そして最初の取材以降の気持ちの変化やふるさとへの思いなど皆さんの声をお届けします。

「浪江のこころ通信／第78号」への感想をお寄せください。

【連絡先】〒979-1592

双葉郡浪江町大字幾世橋字六反田7-2

「浪江のこころ通信」宛

FAX.0240(34)4593





## 叶谷 勇郎さん・タケ子さん(幾世橋)

取材者：特定非営利活動法人寺子屋方丈舎 江川  
取材日：9月10日

### 海の仕事を懐かしみながら



▲浪江のご自宅でのお二人。  
これからもお元気でお過ごしください。

勇郎さんは、震災前は漁師で、家族で海の仕事をしながら生活してきました。かつての暮らしを懐かしみつつ、今はご夫婦で家庭菜園などを楽しみながら暮らしていらっしゃいます。

震災後リフォームした町内のお家に、新しい住人の猫と一緒に帰ってきたお二人に現在の生活についてお話しいただきました。

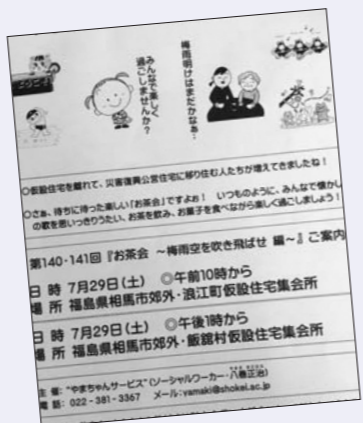
**◆浪江さん** 震災後は、家族全員で山形へと避難しました。福島から避難して来たというところで、快く受け入れていただき、深く感謝しています。一方で、複雑な気持ちもありました。「いろいろ配慮していただいて、本当にありがとうございます」

**◆家庭菜園が喜ぶ**  
勇郎さん 息子家族は、現在、神奈川県に住んでいます。時折、息子家族の所へ行きますが、そ

**◆親子で船に乗り魚を獲った毎日**  
勇郎さん 震災前には漁師として、仕事をしていました。息子家族も同居していたので、夜明け前から息子と二人で漁に出て、獲ってきた魚は、妻が港で仕分けてと、家族全員で海の仕事をしていました。カレイやヒラメ、小女子やシラスと季節ごとの魚を獲っていました。  
タケ子さん 夫とは昭和46年に結婚しました。酒もタバコもたしなまない、真面目で実直、仕事熱心な夫のことを、私の母もすごく気に入っていました。

います。」という気持ちと、誰が悪いとかではなく、人に世話になつて自分の存在がどこかやるせない、そんな気持ちになりましたね。  
**◆話をするとつながれます**  
勇郎さん 福島に戻り、相馬の仮設住宅での暮らしは5年4か月余り続いたので、運動不足で足が弱り、歩けなくなつては大変だから、毎日のように散歩をしました。  
タケ子さん 近所の女同士でたくさん話をしました。昔からの知り合いというよりは、仮設で知り合った人が大半です。筋トレ体操をやったり、カラオケをしたりと、楽しい時間を過ごしました。

の度に孫の成長の早さを感じています。あれから7年目です。あつという間で、暮らしも変わりましたが、今は家庭菜園が一つの楽しみとなつています。海では、体を使って暮らしていたので、陸に上がると何にもできないから、せめてナス、キュウリ、アスパラ、にんじん、レタスなどの野菜を作りながら、夫婦で暮らしています。  
タケ子さん 漁師は、昔から食べるのが基本です。いっぱいご飯を作つて、家族全員仲良く食事をして、家族全員仲良く出します。また、南相馬で買い物をしてストレスを発散しています。



▲いまでも届く仮設からの便り



## 木幡 涼子さん(権現堂)

取材者：NPO法人くびき野NPOサポートセンター 橋詰  
取材日：9月27日

### 浪江のことは片時も忘れたことはない



▲浪江の風景や当時の思い出を懐かしむ木幡さん

現在、新潟県柏崎市で一人暮らしをしている木幡さん。浪江町の写真を見ながら、浪江への思いをお話しいただきました。

ここ柏崎も良いところだけど、浪江に戻れるなら戻りたいと語られていたのが印象的でした。

**◆あつという間の6年**  
震災発生から今日までの6年間は長いようであつという間でした。震災当時の事は今でも鮮明に覚えています。  
経験したことの無いものすごい揺れで、自宅のブロック塀も倒れるほどでした。すぐに家を飛び出し、近くの駐車場にみんなで集まり、様子を見守っていました。翌朝、孫たちが一度戻ってきたタイミングで近くの体育館に避難しようとしたのですが、満員で入ることができませんでした。その時はどうしようかと思いましたが、ガソリンスタンドを探しながら、しばらく車で移動を続け、なんとか空いている体育館があるという情報を聞き、そこに駆け込みました。

**◆故郷は特別な存在**  
約5年過ごした福島市の仮設住宅から、昨年の6月に現在の新潟県柏崎市に在、その友人は南相馬市の公営住宅にいます。時々思い出しては寂しくなりますが、元気でいてくれることを願っています。

その後各地を転々とし、平成23年8月から福島市の仮設住宅に入りました。最初は知り合いもいなくて寂しさや不安を感じていましたが、偶然友人が隣の部屋に来てくれたのでとても助かりました。毎日お互いの部屋に遊びに行つては、夕方までお茶を飲んだりいろいろな話をしたりして過ごしていました。

浪江に戻つてほしいと心から願っています。

震災から6年が経ちましたが、浪江の自宅は庭なども手入れできていないので、まだまだ荒れたままです。幸いにも自宅の損傷はほとんどありませんでしたが、現在も周りに帰宅者はいないようです。それでも浪江のことを忘れた日はありませんし、いつか帰りたいと思つています。もちろん柏崎も素晴らしい所です。周りの環境もいい所ですが、やはり故郷はいつまでも特別な存在です。いつかまた、笑顔で暮らせる浪江に戻つてほしいと心から願っています。